

社会史国際研究所に所蔵される 第一インターナショナル関係の文書

—— ユングの遺稿集を中心に ——

渡 辺 孝 次

アムステルダムの社会史国際研究所（以下 IISH と略示する）に、労働運動史や社会主義関係の文書が数多く所蔵されていることはよく知られている。したがってまた、国際労働者協会（以下「第一インターナショナル」という呼称を用い、さらに「第一インター」と略示する）に関する文書も豊富である。筆者は国外研究として、2002年8月～2003年4月の期間この研究所に通う機会を得た。その際参照した、以下の人物に関する文書について、順を追って説明する。

1. ミハイル・バクーニン (Bakunin, Michail. A. 1814-1876)

言うまでもなく、第一インターにおいてマルクスと対抗したロシアの無政府主義者である。第一インター内に秘密結社として「社会民主同盟」を結成したことを非とされて、ハーグ大会で組織から除名された。またこのことを機に、第一インターは事実上マルクス主義陣営と自治主義陣営（アナーキズム陣営だけではなかった点に注意）に分裂した。分裂状態は数年間続いたが、1876年にバクーニンがスイスのベルンで客死したことが、各国の社会主義者たちが大同団結する気運を生み出した。しかし大同団結は結局実現せず、社会主義の本流は、これ以降アナーキズムを閉め出した。

バクーニンに戻れば、無政府主義者として生涯を送ったことに加えて、彼は、ドレスデンで1848・49年革命に参加して以来、死ぬまでロシアやヨーロッ

パにおける革命を夢見た革命家でもあった。

さて、彼に関する IISH の所蔵文書量は「1.12 m」と表示されている。このように、文書を、それを重ねた厚みに相当する数字で表していることは興味深い。この 1.12 m という数値は、マルクス・エンゲルスの「8 m」よりはもちろん少ないが、それでもかなり充実していると言える。かつては、この文書に関し IISH が作成した目録冊子（以下「インヴェントリー」と呼ぶ）があったらしいが、現在はもうない。理由は次のようである。

彼に関しては IISH の編集で『バクーニン・アルヒーフ Bakunin Archiv, Archives Bakounine』が 1963 年から出されてきた。I-i, I-ii, II と出て、VII まで出た。VII が出たのが 1981 年である。その後しばらく何も出版されない状態が続いたが、続巻を出す代わりに、2000 年に CD ロムが出された。その中身は、これまでに出版された文書全部に加え、さらに未出の資料も含むというものである。そして、この CD ロムの目次が、新しいインヴェントリーになっているのである。目次は著作欄と書簡欄に別れており、それぞれが年代順に分類されているからである。このように、印刷文書が電子文書に変えられたことが、インヴェントリーがなくなった理由である。それにしても、1.12 m 分の文書が CD ロム 1 枚の中にすべて入っていることを考えると、この CD ロムはすごい存在だと言わねばならない。

2. アウグスト・ベーベル (Bebel, Ferdinand August 1840-1913)

W・リープクネヒトとともに、1869 年にアイゼナッハでドイツ社会民主労働党を結成した人物であるが、第一インターの歴史において目立った役割を演じることはなかった。IISH に所蔵されている文書量は「25 cm」であり、インヴェントリーもある。だがそれによれば、所蔵されている文書のほとんどは第一インター期より後のものである。ここで第一インター期を 1864 年～1877 年と定義すると、その時期に書かれた文書は 10 程度であり、それも内容的に、第一インターとはほとんど関係ないものばかりだと思われる。

3. ヨハン＝フィリップ・ベッカー (Becker, Johann Philipp 1809-1886)

ドイツ三月前期に運動に加わり、1848・49年にバーデン革命に義勇軍を率いて参加した古参の活動家である。1860年にはイタリアに赴いてガリバルディの運動に加わった。第一インター期には、スイスのジュネーヴを本部として、ドイツ語を話す支部をまとめる「ドイツ語支部グループ Sektionsgruppe deutscher Sprache」を結成し、機関誌として『フォアボーテ Vorbote』を出した。インターの内紛に関しては、当初はバクーニンを支持し、自らもバクーニンの結成した「社会民主同盟」のメンバーであったが、その後マルクスの陣営に鞍替えした。ISHの所蔵する文書量は「80 cm」であり、インヴェントリーもある。その中の書簡部門で差出人欄を見ると、第一インター期にスイス(特にジュネーヴ)で活躍した活動家たちの名前が続出する。まずバクーニンが1868年～70年の間に8通、1867年に関しブロッセ (Brosset) が2通、1869年から70年にかけてブルーイン (Bruhin) が4通、1866年から67年にかけてビュルクリ (Bürkli) が4通、1868年から69年にかけてクロッセ (Crosset) が3通、1867年から68年にデュプレクス (Depleix) が2通、1868年から77年にかけてグロイリヒが23通、1869年から70年にかけてギヨームが5通、1869年にエング (Heng) が2通、1869年から70年にかけてヤナシュ (Jannasch) が6通、1870年にウーチン (Outine) が1通、1868年から77年にかけてアンリ・ペレ (Perret) が5通、1870年にペロン (Perron) が3通、1867年に関しルクリュが1通、などである。以上はジュネーヴを中心とするスイス関係であるが、それだけでなく、1871年から72年にかけてクーノが7通、1869年から70年にかけてエッカリウスが3通、1868年から73年にかけてユングが9通、1866年から77年にかけてクーゲルマン (Kugelman) が12通、1873年にミルケ (Milke) が1通、1868年にド・ペープが2通、1867年から84年にかけてゾルゲが54通、1868年から73年にかけてシュタルケ (Starke) が31通など、スイス外の活動家とのやり取りもある。管見の限りでは、彼の書簡集はまだ出ていない。しかしスイスにおける第一インター史に関して言えば、彼の存在は

非常に重要である。上のものを取りまとめた書簡集の発行が望まれる。

4. アンドレア・コスタ (Costa, Andrea 1851-1910)

カフィエロやマラテストと並ぶ、イタリア連合の若いリーダーの一人である。第一インターの内紛においては、イタリアは一貫してジュラ連合の味方であった。IISH が所蔵するのは、マイクロ・フィルムのリール1本だけである。それに含まれるのは、コスタに対する訴訟文書やガリバルディ、マラテストら宛の彼の手紙類である。フィルムに撮影されている文書の所蔵元はイタリア、ボローニャの Archivio di Stato である。

5. テオドア・クーノ (Cuno, Theodor F. 1847-1934)

ドイツ代表としてハーグ大会にベルギーの町ヴェルヴィエから参加した活動家で、同盟問題委員会で委員長を務め、バクーニンとギヨーム、シュヴィッツゲーベルの除名を提案する原案を作成した人物である。ただし大会では、シュヴィッツゲーベルの除名は否決された。IISH が所蔵するのはマイクロ・フィルムのリール1本である。その内容は、1932年にモスクワのマルクス・レーニン研究所の依頼でクーノが書いた第一インター史の原稿と、ゾルゲなどへの手紙類である。撮影された文書類を所蔵するのは、モスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」(ただし、1999年3月に「ロシア国立社会・政治史アルヒーフ」と改称された。以下「現代史…」の旧称を用いる)のファンド189である。

6. ヴィクトール・ダーヴ (Dave, Victor J. L. 1845-1922)

ベルギー出身の活動家で、ハーグ大会にはオランダのハーグ支部を代表して参加した。大会ではバクーニンとギヨームの除名に反対し、またニュー・ヨークに移転された新総評議会の権限を認めないという「少数派」の宣言文書を読み上げた。IISH が所蔵する文書の量は「30 cm」である。それに対する、冊子

にはなっていない目録（以下「リスト」と呼ぶ）がある。それを見ると、第一インターに関する文書はフリューズ（Fluse）からの手紙が2通、ギヨームからの手紙が4通である。それ以外は、1880年代以降に書かれたものである。

7. セザール・ド＝ペープ（De Paepe, Cesar 1842－1890）

ハーグ大会では少数派を支持し、分裂後は反権威主義インターナショナル内でギヨームと並ぶ重要な役割を演じた人物である。しかし1874年頃から、国家の廃止というアナーキズムのスローガンに否定的になり、最終的にマルクスとバクーニンの間を行く路線をとったという特徴あるベルギーの活動家である。インヴェントリーがあるが、わずか2頁と薄い。文書量も「3cm」と少ない。インヴェントリーによれば、第一インター期に関わる手紙としてはマロン宛のものが3通ある。マロン以外の人物の手紙も4通ほどあるが、筆者の知らない人物宛か人物からのものである。またさらに、モスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド487から作成したマイクロ・フィルム1巻も、IISHは所蔵する。ファンド487に関するモスクワ制作のインヴェントリーもある。その内容としては、1874年～75年の研究サークルの議事録が第一インターと関係する。手紙類では、関係する文書は少ない。

8. ゲオルク・エッカリウス（Eccarius, Johann Georg 1818－1889）

総評議会のメンバーであるが、ハーグ大会後には反マルクス派をなすイギリス連合評議会に加わり、総評議会を批判する発言をおこなった人物である。このような事情があったため、ハーグ大会に出席しなかった。IISHが所蔵するのはマイクロ・フィルムのリール1本だけである。撮影されている文書の所蔵元はモスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド188である。このファンドに関するモスクワ制作のインヴェントリーもある。内容的には、第一インターに関する覚え書きのほかはイギリス関係と手紙類のようである。手紙の中では、1874年頃のユング宛のものが主である。

9. ヘルマン・グロイリヒ (Greulich, Hermann 1842-1925)

チューリヒを中心としたスイスのドイツ語圏の運動を指導し、「労働者同盟 Arbeiterbund」の機関誌である『ターク・ヴァハト Tagwacht』をこの町で編集・出版した人物である。チューリヒ支部を代表して、1869年9月のバーゼル大会にカール・ビュルクリらとともに出席した。ドイツと同様「人民国家 Volksstaat」の考え方を支持し、国家の役割と議会主義活動を重んじる点をめぐってジュラ連合と対立した。ただし彼の場合、スイスにおける直接民主主義の伝統が影響を及ぼしていた点が、ドイツの活動家たちとは異なると言える。IISHの文書量は「2 cm」であり、それに対してリストがある。しかしながら、リストを見ると、すべて第一インター期以後に書かれたものばかりである。

10. ジュール・ゲード (Guesde <Bazile>, Jules 1845-1922)

「ゲード」は偽名であり、Bazile が本名である。のちにマルクス主義者になりフランス労働党 (Parti Ouvrier Français) を結成するが、パリ・コミューン後にスイスに亡命し、ジュラ連合のメンバーだった時期もある。しかし1876年にフランスに帰国して以来、ジュラ連合と対立するようになっていく。IISHが所蔵する文書量は「2.25 m」と多いが、インヴェントリーもそれに応じて分厚い。だが内容的には、第一インターに直接関連する文書は見出せなかった。

11. ジェイムズ・ギヨーム (Guillaume, James 1844-1916)

ジュラ連合のリーダーの一人で、『プログレ Progrès』、『ソリダリテ Solidarité』、『ジュラ連合会報 Bulletin de la Fédération jurassienne de l'Association internationale des travailleurs』の編集に一貫して携わった。バクーニンの結成した「社会民主同盟」に所属したことを理由に、さらにはその自治主義的、連合主義的な思想を嫌われて、第一インターのハーグ大会で、バクーニンとともに組織から除名された。しかしこれを契機として、かえって、ニュー・ヨークに移

転された総評議会の権限を認めない「反権威主義インターナショナル」の実質的な指導者になった。IISHの文書量は「30 cm」であるが、インヴェントリーもリストもない。その内容は、肉親との手紙や、アルペン・クラブへの寄稿記事、ソシユールの『一般言語学講義』など多様だが、第一インターに関するものとしては、パリで20世紀初めに出された『バクーニン全集』全6巻の続編として用意された未編集の原稿が重要であろう。同じファイルに入っているパリの編集者からの手紙によって、この「第7巻」は出版されない運びになったことが分かるが、ギヨームの計画では、この未刊に終わった第7巻は、イタリアに関するバクーニンの考えを示す資料として、バクーニンが出版社や活動家たちに出した手紙を収録する予定だったようである。ギヨームのアルヒーフには、さらに、バクーニンが1872年2月～3月にジュラ連合に書いた「ジュラのインター諸支部・連合の仲間へ」と題する手紙のギヨームによる写しも含まれる。しかし、これには章に相当するナンバーがふってないので、上記未発行に終わった第7巻に入れる予定ではなかったと思われる。ちなみにこのバクーニンの手紙は、IISH発行の『バクーニン・アルヒーフ』のⅡに収録されている。総じて、ジュラ連合の実質的リーダーのアルヒーフであるが、第一インター史に限定して言うならば、イタリア関係を除けば、それほど使い度があるとは言えない。ギヨームに関するより使える文書類は、おそらくスイス各地の文書館を回って収集するほかないだろうと思われる。

12. モーゼス・ヘス (Hess, Moses 1812-1875)

ヘーゲル左派の思想家の一人で、共産主義とシオニズムを結びつけようとした人物である。第一インターに関係する事柄としては、1869年のバーゼル大会に出席し、その後にバクーニンを中傷する新聞記事をパリの新聞に寄稿したことが知られる程度である。IISHの文書量は「75 cm」であり、インヴェントリーもかつてはあったようだが、筆者は見つけられなかった。HTML化されたインヴェントリーが下記にあるので、それに代えられたのかもしれない。内

容的には、1868年～69年の間にJ・Ph・ベッカーとの間、さらにはバーゼル支部との間に交わされた手紙類が重要かと思われるが、研究所で注文して現物を見ることまでは、筆者はしなかった。

<http://www.iisg.nl/archives/html/h/10751002.html>

13. ヘルマン・ユング (Jung, Hermann 1830-1901)

8のエッカリウス同様、ユングもまた、総評議会のメンバーであったのに、ハーグ大会後にはイギリス連合評議会に加わり、総評議会を批判する発言をおこなった。だがエッカリウスとは異なり、ユングはスイスのジュラ地方出身の時計工であった。また、総評議会内部でスイス担当の通信員を務めた。さらにそれだけでなく、多言語に通じていることなどが買われて、1865年のロンドン協議会で副議長を、さらに66年のジュネーヴでの第1回年次大会、68年のブリュッセルにおける第3回年次大会、69年のバーゼルにおける第4回年次大会、そして71年のロンドン協議会ではいずれも議長を務めている。ハーグ大会には彼は出席を拒否したが、そのことは、ハーグ大会までに、彼がマルクスらに対して批判的になったことと関連している。いずれにしても、こうしたことを総合すると、第一インター史における、中でもスイスにおける第一インター史における彼の意義は、エッカリウスとは比較にならないくらいに大きいと言わねばならない。そのことを考えて、ここで彼の生涯をかいつまんで紹介しておこう。

ヘルマン・ユングは、スイスのジュラ地方にあるサン・ティミエでドイツ人の両親のあいだに生まれ時計工としての修行を受けた。その後彼は、10代の若さで、1848・49年のドイツ革命に、おそらくJ・Ph・ベッカーの組織した義勇軍に加わって参加した。また、ユング自身の手紙によれば、彼は1851年に、P・クルリー (Coullery) の『労働者』紙のドイツ語かフランス語かの版によって社会主義に開眼した。1856年に、彼は26歳でロンドンに渡り、48年亡命者のサークルでマルクスを知り、深い敬意を抱くようになった。

1864年11月1日に、彼は総評議会のスイス担当通信員になり、多言語に通じていることと弁舌の才能を理由に、65年のロンドン協議会で副議長を務めたの皮切りに、その後の大会の多くで議長を務めた。しかし、72年のハーグ大会を前にして彼はマルクスやエンゲルスに対して批判的になった。そして、イギリス連合が分裂すると、彼は反総評議会の立場をとるヘイルズを支持した。1874年になると、彼はこの態度を改め、マルクス派に接近するよう見えた。しかしマルクスの死後には、彼は1889年の労働者国際会議を前に、H・M・ハインドマンの「社会民主連合」に加わり、エンゲルスとドイツの社会民主党に反対した。1901年、彼は不幸にもロンドンで強盗によって殺害された。彼の葬儀にはP・クロボトキンも参加した。

さいわいIISHには「1m」の関係文書が保管されている。これは彼の遺稿集を形成している。インヴェントリーもある。以下、それを少し詳しく紹介しよう。

ユングの遺稿集の内容

インヴェントリーによれば、彼の遺稿は次の7つに大別されている。A 年次大会・協議会関係、B 総評議会関係、C 諸支部関係、D 会計文書（領収書など）、E 書簡、F 個人的文書、G その他、である。

文書の量は、Aが84アイテム、Bが54アイテム、Cが172アイテム、Dが113アイテム、Eが700アイテム以上、Fが17アイテム、Gが4アイテムである。全部で1,143アイテム以上ある。インヴェントリーにふられている資料番号とアイテム数は合わないが、理由は、番号の付されていない資料があることと、1つの番号にa, b…と複数の資料が割り当てられていることがある、という事情による。

〈A 年次大会関係〉 1865年のロンドン協議会に関するものが7アイテムあり、翌年のジュネーヴ大会関係が53アイテム、67年のローザンヌ大会関係、68年のブリュッセル大会関係が各1、71年のロンドン協議会が7（うち文書

番号70は「社会民主同盟」に関する決議である), 72年のハーグ大会が2(うち文書番号72は, この「社会民主同盟」に関して大会の調査委員会が起草した報告書である), 73年のジュネーヴ大会が7, 74年のブリュッセル大会が1, 77年のヴェルヴィエ大会が2アイテムである。してみれば, ほぼ完全にすべての大会・協議会を網羅していると言いうる。ただし, 1869年にバーゼルで開かれた第4回大会に関しては含まれていない。この大会でも彼が議長を務めただけに, 不思議である。

〈B 総評議会関係〉 まず議事録が4部あり, それぞれ1864年9月28日~66年8月21日, 66年9月18日~69年8月31日, 69年9月14日~72年5月21日, そして72年5月28日~8月をカバーしている。さらに, 総評議会が各国支部・連合に向けて発した種々の通知が含まれるが, そのうちのめぼしい物を紹介すると, 1870年3月28日にマルクスがドイツのクーゲルマン宛に出した非公開通知 (Konfidentielle Mitteilung), 1872年3月5日付で出された私的回状 (Privatzirkular) である「インターナショナルのいわゆる分裂」, アメリカの分裂に関する総評議会の決定 (72年3月12日付) などである。上で説明したように, ユングはハーグ大会直前にマルクスと総評議会に批判的になったのであるが, 彼の遺稿にはハーグ大会以降の文書も含まれ, ニュー・ヨークのゾルゲが各国支部・連合に送った, ジュラ連合の資格停止の回状 (73年1月), ハーグ大会で決議されたことの通知 (同年同月), 73年7月に出されたパンフレット「社会民主同盟と国際労働者協会」のドイツ語版なども見出される。

〈C 諸支部に関する資料〉 ベルギー, ドイツ, イギリス, フランス, ア일랜드, イタリア, オーストリア, ロシア, スイス, スペイン, アメリカ合衆国が対象国である。文書数はイギリスの51が最大で, 次いでフランスが38, アメリカ合衆国が33, ドイツが15, スイスが14, それ以外の国は10未満ずつである。その中のスイスの14アイテムを見てみると, マルクスやエンゲルスが執拗に問題にした「社会民主同盟支部」に関する文書が2つ見られる。1つはこの支部の綱領や規程などを説明した総評議会へのユングの報告書

で、1868年10月に書かれている（文書番号251）。もう1つは同支部への加入証で、加入者の名はMoreau、保証人がBauletで、それ以外には支部長としてのバクーニンと、書記としてのエングの名前も記されている。日付は1869年7月10日である（文書番号254）。

〈D 会計関係〉 数こそ114アイテムであるが、ジュネーヴ支部の会計報告が何種類か見られるほかは、1871年～72年の会費納入者の名簿が主である。そこに102名分の名前が挙がっており、102アイテムを占めているからである。うち、筆者の知る名前を挙げると、バリー、エッカリウス、フランケル、ジェニー・マルクス、ル＝ムーシュ、セライエなどである。

〈E 書簡〉 700アイテム以上と膨大であり、カヴァーする国々も非常に広い。分類は国別のかたちをとっておらず、アルファベット順である。ここでは、その中からスイスに関するものに限定して紹介すると、まず問題の「社会民主同盟」関係が2通ある。1つは1871年8月6日付で総評議会宛のものであり（文書番号419）、日付から分かるように、ジュネーヴのジュコーフスキーらが同支部を解散したという通知である。ついでながら、この解散はバクーニンの反対にもかかわらずおこなわれたのであった。もう1つも総評議会宛であり、1869年8月8日付である（文書番号961）。内容的には、同盟支部の会費を総評議会に払い込んだという通知であり、会員数は104名となっている。

団体からのものとしてそれ以外では、ジュネーヴの中央委員会がユング宛に1867年3月28日に出した手紙が1通、ロマン連合中央委員会が総評議会宛に1869年～1871年の間に出した手紙が5通、同委員会がユング宛に同時期に出した手紙が9通、ジュネーヴ連合カントン評議会が1872年に総評議会宛に出した手紙が2通、バーゼル支部が1869年～1870年にかけて総評議会宛に出した手紙が2通、ジュネーヴ支部が1867年にユング宛に出した手紙が2通、ローザンヌ支部が1867年10月10日に総評議会宛に出した手紙が1通、ル・ロクル支部が1867年5月15日に総評議会宛に出した手紙が1通、チューリヒ支部が1871年12月18日に総評議会宛に出した手紙が1通、同支部がユング宛

に1872年1月に出した手紙が1通などである。

また個人の書簡としては、まずJ・Ph・ベッカーからユング宛が12通（時期は1866年～71年）、1870年6月13日付でブルーインが総評議会宛に出したものが1通、カール（Card）が1866年～1868年の間にユング宛に出した手紙が6通、クルリーが1867年3月26日に「中央評議会」（総評議会の前身）宛に出した手紙が1通、デュプレクスが1868年2月4日にユング宛に書いた手紙が1通、デュヴァル（Duval）が1870年6月7日にユング宛に書いた手紙が1通、フロケ（Floquet）が1874年2月27日にユング宛に書いた手紙が1通、グロイリヒが1872年8月4日にユング宛に書いた手紙が1通、ギヨームが1870年4月21日にユング宛に書いた手紙が1通、メルミヨ（Mermilliod）が1868年にユング宛に書いた手紙が4通、ウーチンが1870年にユング宛に書いた手紙が2通、アンリ・ペレが1868年～1874年の間にユング宛に書いた手紙が27通、ペレが1872年～1873年の間に総評議会宛に書いた手紙が5通、ペロンが総評議会宛に1868年8月18日に書いた手紙が1通、同じペロンが1867年～1869年の間にユング宛に書いた手紙が4通などである。

書簡の最後として、1870年4月7日付で、ロマン連合ラ・ショー・ド・フォン大会に関して書かれたものを紹介しておこう。これは、同大会でロマン連合が分裂したことをラ・ショー・ド・フォン支部が総評議会に報告しているという内容である。ラ・ショー・ド・フォン支部が報告しているのであるから、立場としては完全に大会の「少数派」、つまりジュネーヴ・グループとラ・ショー・ド・フォン支部の側からの説明である。実際、手紙の最後に連ねられている署名欄は28名であり、これはギヨームが『インターナショナル―資料と回想―』に挙げている少数派の人数に一致する（cf. tome 2, p. 6）。ただ、その中にクルリーの名が見出せないのは理解できない。

〈F, G〉 書簡以外の文書に戻れば、Fはユングが加わった組織の会員証類が17アイテムである。そのうち4アイテムは、第一インターの発行したものであった。またGは雑多な内容が4アイテムで、そのうち1つは、ユング、

エレノア・マルクス、カール・マルクス、J・Ph・ベッカー宛に来た手紙に対して、ユングの書いたメモである。

一番後ろにHとして、人名索引がつけられている。これは全部で27ページにわたり、きわめて詳しい。

ユングの遺稿集は、以上のものから成る。文書はすべてマイクロフィルム化されており、読むにはマイクロ・リーダーが必要である。コピーを望む場合は、このフィルムから焼きつける。つまり、元の文書を直接目にはできない。

14. ピョートル・クロポトキン (Kropotkin, Petr A. 1842-1921)

『ある革命家の手記』の著者として有名な無政府主義者で、1872年にジュラ地方を訪問してアナキストになったと同手記で自ら記している。1876年頃に、再度ジュラ地方を訪れて一時住んだ。1876年頃からは、ポール・ブルース (Brousse) らと「フランス連合」の機関誌として『アヴァン・ギャルド L'Avant-Garde』を編集・発行した。IISHが所蔵するのはマイクロ・フィルムのリール2本である。ギヨームとの間にやり取りされた手紙類を含む。オリジナル文書の所蔵元は、モスクワにあるロシア国立図書館である。ただし、リールの内容を示す手引きはない。

15. ポール・ラファルグ (Lafargue, Paul 1842-1911)

マルクスの娘のローラの夫となった人物で、スペインに乗り込んでマルクスと総評議会の影響力を強めようとしたことで知られる。そのため、バクーニンやジュラ連合支持の地元勢力と対立に陥った。ハーグ大会でも、4人のスペイン連合代表を向こうに回し、彼一人だけがマルクス派であった。さて、IISHが所蔵するのはマイクロ・フィルムのリールが3本である。撮影されている文書の所蔵元はモスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド10である。このファンドに関するモスクワ制作のインヴェントリーもある。

16. フリードリヒ・レスナー (Lessner, Friedrich 1825-1910)

マルクスの友人で、総評議会のメンバーであり、ハーグ大会でもマルクスの側に立って行動した。IISH が所蔵するのはマイクロ・フィルムのリール1本だけである。撮影されている文書の所蔵元は、モスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド181である。

17. ヴィルヘルム・リープクネヒト (Liebknecht, Wilhelm 1826-1900)

ベーベルとともに、1869年にアイゼナッハでドイツ社会民主労働党を結成した人物である。第一インターに関係しては、1869年のバーゼル大会に参加し、バクーニンの名誉裁判、すなわちバクーニンがロシアのスパイであるとする噂が広まったことにリープクネヒトが責任があったとする「裁判」がおこなわれたという事実がまず挙げられる。また、彼の編集する『フォルクス・シュタート Volksstaat』紙が、マルクス派の立場に立った記事を色々載せたこと、1877年のヘントでの万国社会主義者会議に彼が出席したこと、なども重要である。IISH が所蔵する文書は「1.43 m」であり、インヴェントリーがある。それによれば、第一インターと関連しそうな資料は彼が出した書簡として、J・Ph・ベッカー宛が1通、ブラッケ (Bracke) 宛が1通、レスナー宛が1通などがあり、また彼宛のものとしては、差出人としてダーヴのものが1通、エッカリウスのものが4通、ヘプナー (Hepner) のものが1通、ユングのものが1通などである。以上は、筆者が知っている人物に限って、時期を限定して特定した結果だが、筆者の知らない活動家から、または活動家宛の文書にも関係するものがあるかもしれない。所蔵文書としては、さらにまた、モスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド200に所蔵される文書のマイクロ・フィルムが12リール入っている。それに関するモスクワ制作のインヴェントリーも、全部で11冊ときわめて充実している。

18. ブロワ・マロン (Malon, Benoît 1841-1893)

パリ・コミューンの亡命者としてジュネーヴに逃れ、1872年春にマルクスとエンゲルスが執筆し、同年5月に総評議会が出版したパンフレットである「インターナショナルのいわゆる分裂」の中で攻撃されたことに對抗するなどの理由から、一時はジュラ連合の活動に好意的であった人物である。しかし、その後イタリアの活動に対する評価をめぐってイタリア連合と対立し、ひいてはジュラ連合とも対立するにいたった。またフランスとの関連においては、彼は後年ポール・ブルースと並んで「オポルチュニスト」となった。これは、「必要な際には革命的に、通常は改良主義的にふるまう」という政治的立場のことである。さて、IISHが所蔵するのはマイクロ・フィルムのリール1本だけである。撮影されている文書の所蔵元はモスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド245である。それに関するモスクワ制作のインヴェントリーもあることになっている(末尾の文献参照)が、筆者は見つけられなかった。

19. マルクス／エンゲルス

すでに他で紹介されていると思われるし、膨大な分量に及ぶので、省略する。

20. エリゼ・ルクリュ (Reclus, Elisée 1830-1905)

地理学者で、バクーニンの結成した「社会民主同盟」の創立メンバーの一人であり、彼の死後も無政府主義の思想に忠実でありつづけた。ジュラ連合に対する支持も、連合解散まで変わることがなかった。IISHは、マイクロフィルムのリール5本を所蔵する。撮影されている文書の保管元はモスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド369である。それに関するモスクワ制作のインヴェントリーもある。

21. フリードリヒ・ゾルゲ (Sorge, Friedrich A. 1828-1906)

マルクスの友人で、アメリカを代表してハーグ大会に出席し、大会の後半に

は、総評議会の所在地移転をめぐる不満から大会を去ったブランキ主義者のランヴィエの跡を継いで議長を務め、移転が決まったニュー・ヨークで総評議会の長官を務めた人物である。しかし総評議会はアメリカではうまく機能せず、1876年にゾルゲらは、総評議会の名で、第一インターの事実上の解散宣言を出した。IISHが所蔵するのは、ニュー・ヨーク公立図書館の所蔵する彼の書簡などのマイクロ・フィルムのリール2巻と、モスクワの「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド1, 21, 185, 187, 200から撮ったマイクロ・フィルムのリール2巻である。前者については、IISHの制作したリストがあり、書簡の1868-1878年分を見ると、差出人としてJ・Ph・ベッカーのものが25通、マルクスのものが19通、エンゲルスのものが20通などがある。後者については、手引きは存在しない。

最後に、個人ではなく組織に関する文書集を2セット紹介しておこう。

1. ジュラ連合

このタイトルでのセットがあり、わずか2頁だがリストもある。リストでは1~25まで通し番号がふられており、それがさらにI~Vのファイルにグループ分けされている。

Iは大会関係の文書のファイルで、1~7が含まれる。1は1870年のサン・ティミエ大会、2は1871年のソンヴィリエ大会、3は1872年のル・ロクル大会、4は1873年のヌーシャテル大会、5は1877年のサン・ティミエ大会、6は1876年ローザンヌの集会、7だけ多少毛色が異なり、諸外国の団体や個人との国際的な通信文書などから成る。

IIとIIIは連合委員会の関係する文書、または連合委員会と諸支部との間にやり取りされた手紙であり、まずIIは8~13を含む。8は、連合委員会の回状、会計文書、通信などである。年代は1870年である。9は同委員会の回状が中心である。年代は特定できなかった。10は諸支部への手紙類が中心で、年代

は1通1875年と判読できた以外は特定できなかった。11は会計文書、呼びかけ、『ジュラ連合会報』の購読者リストなどを含む。12と13は雑多な文書から成っており、年代を特定することもできない。

Ⅲは14～19を含み、14は、76年秋にバーゼルのイタリア語支部との間に交わされたやり取りである。15は、1876年～77年の間にベルンの「社会民主協会 Sozialdemokratischer Verein」との間に交わされたやり取りである。16は、ベルンのプロパガンダ支部との間に1874年～77年の間に交わされたやり取り、17はベルンのイタリア語支部との間に1876年～77年の間に交わされたやり取り、18はラ・ショー・ド・フォンの社会問題研究サークルとの間に1870年～75年の間に交わされたやり取り、最後に19は、クルトラリー地区支部との間に、1878年～1882年の間に交わされたやり取りである。

ⅣとⅤのファイルは各支部に関する文書類であり、Ⅳのファイルには20～23が含まれる。20はベルンの「社会民主協会」の1875年～77年までの期間の規約、議事録、会員リストなどから成る。21はクルトラリー地区支部の綱領である。何年のものかは書いてない。22は、ジュネーヴのプロパガンダ支部の1871年～1877年の間の議事録である。23は、ジュネーヴ支部が1876年のベルン大会でおこなった報告である。

Ⅴのファイルには24と25が含まれ、24は、ローザンヌのプロパガンダ研究サークルと、カントン・ヌーシャテルの諸支部の文書が入っている。25は、ヌーシャテル支部の1874年～77年の会計簿である。

2. 国際労働者協会

このタイトルで集められたモスクワのファンドがある。「現代史文書保管研究ロシアセンター」のファンド21である。IISHはそれについてマイクロ・フィルム of 7リールを所有しており、またモスクワ制作のインヴェントリーもある。IISHが所蔵元というわけではないが、内容的に非常に重要なので中身を紹介しておこう。

文書はローマ数字で XVI までのグループに分類されている。I は 1864 年の創立に関し準備段階の文書や、創立に関する告知文の類である。II ～ X は年次大会関係であり、あとで説明する。XI は総評議会関係の文書であり、規約や決議文などを含む。XII はニュー・ヨークに移されてからの総評議会に関する文書類である。XIII は各支部に関するもので、やはりあとで説明する。XIV に「社会民主同盟」関係のグループがあり、5 アイテムが含まれる。内容的には、84 人の署名がある正規の綱領・規約のほか、数種類の綱領の草案である。続く XV は、様々な人物の、協会創立に関する評価を示す手紙類が中心である。全部で 24 アイテムある。最後の XVI は、以上に含まれない文書のグループである。

さて、あとで説明するとことわった年次大会関係を次に見ると、1865 年のロンドン協議会に関するものが 7 アイテム、翌年のジュネーヴ大会関係が 24 アイテム、67 年のローザンヌ大会関係が 86 アイテム、68 年のブリュッセル大会関係が 59 アイテム、69 年のバーゼル大会が 24 アイテム、開かれずに終わった 70 年のマインツ大会に関するものが 14 アイテム、71 年のロンドン協議会が 13 アイテム、72 年のハーグ大会が 130 アイテム、73 年のジュネーヴ大会が 21 アイテムである。当然と言うべきか、反権威派がこれ以降に開催した大会に関する資料は含まれない。

またこれもあと回しにした諸支部に関する資料としては、まず国としてベルギー、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、オーストリア、ロシア（ジュネーヴのロシア人支部）、スイス、スペイン、アメリカ合衆国という、ユングのコーナーで登場したもののほか、アルジェリア、ハンガリー、オランダ、デンマーク、ポーランド、ポルトガルがつけ加えられる。さらにまた、ロンドンに存在した外国人支部も対象とされている。

文書数としてはベルギーが 85、ドイツが 78、イギリスが 294、フランスが 104、イタリアが 28、オーストリアが 34、ロシア（ジュネーヴのロシア人支部）が 14、スイスが 391、スペインが 34、アメリカ合衆国が 121、さらにはア

ルジェリアが7, ハンガリーが19, オランダが14, デンマークが4, ポーランドが6, ポルトガルが2, ロンドンの外国支部が30である。ユングの場合と異なり, スイスの諸支部に関する文書数が最大である点に大きな特徴があると言えよう。

参 考 文 献

Jaap Haag and van der Horst eds, *Guide to the International Archives and Collections at the IISH, Amsterdam*, International Institute of Social History, Amsterdam 1999

参照サイト：<http://www.iisg.nl/>

後記：本稿は，2002年度松山大学国外研究の成果の一部である。